⑨中庭を囲んで回廊式に廊下が巡り、どこからでも中庭の自然を親しめる。長い廊下は高齢者には体力的に負担になるため途中にソファが置かれていたり、また徘徊を誘発しないように随所に工夫が施されている。⑩見た目にはわからないが窓枠の一部が手摺りの役目を果していて、廊下を歩くときにお年寄りが自然に手を添わせて歩行をサポートするようにしている。⑪⑫中庭には枕木が緩やかな勾配で敷かれ、素足でも脚の裏を心地よく刺激して気持ちが良い。⑬写真左手に見える「カツラ」の樹には小鳥のえさ場があり、無数のスズメたちが餌を求めて集まってくる。いかにものどかで微笑ましい光景だ。中庭には石の手水鉢がある。水の音はいい刺激になるという。

魚を選んで置いているんです」。これなら誰の目にもとまりやすく玄関だと識別できる。同じように、つるつる頭で丸まるした木彫りの布袋さんは、不都合な時間に外に出かけようとする意識を、それを撫でることで気をそらせようという工夫だ。玄関周りだけでもこれだけの配慮と仕掛けが施されている。

蓬田さんによると「玄関の雰囲気が、明るくて家庭的で温かいかそうでないかの印象で、その家に親近感を持ったり、反対に緊張して脚がすくんで嫌な印象や感情を持ったりする。玄関の最初の印象が大事なんです」という。その言葉通りに非常に親近感を覚えた。この建物の空間にふれると故郷の家に帰ってきたような錯覚を抱く。生理的になにか非常に懐かしい思いと、人肌ほどの温かな空気の漂う空間に感じる居心地の良さ……いったい何がそうさせるのだろう。

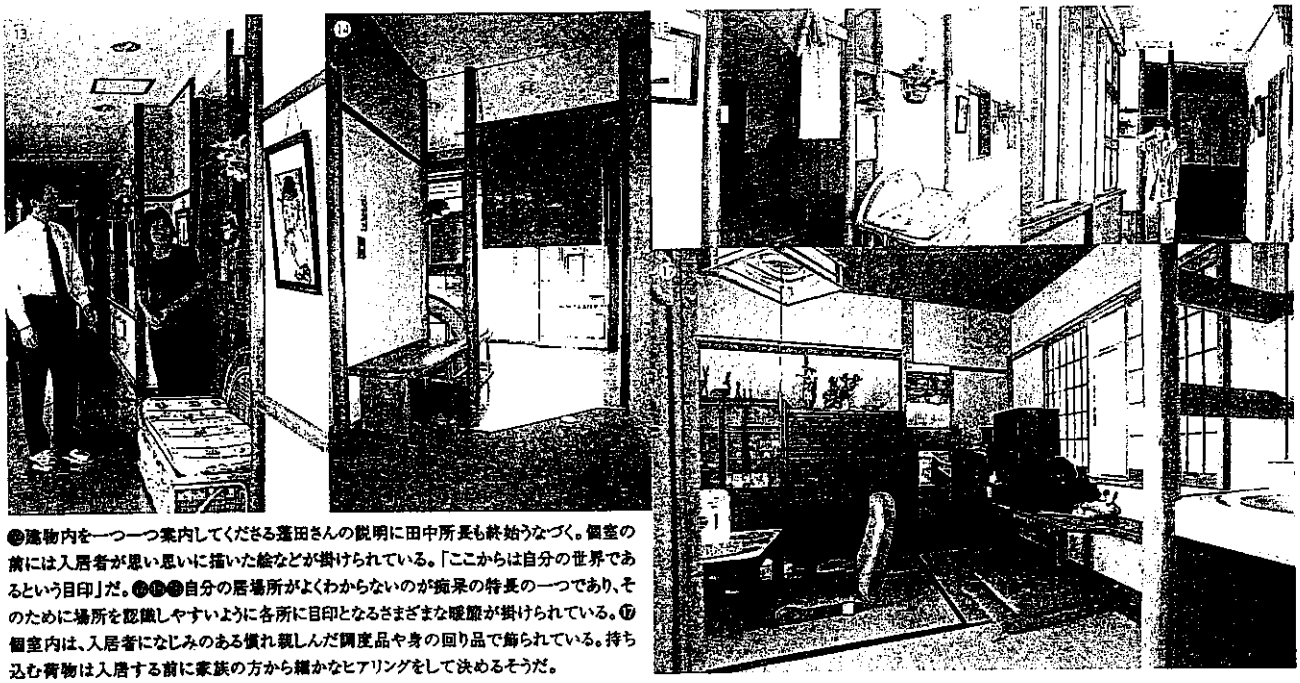
玄関を上がって、そこから見渡す風景は左右に廊下が分かれ、正面には中庭を挟み対角線上に食堂があり、くつろいでいるお祖母さんの姿が見える。床は木のフローリングで脚の裏に伝わる感触が肌に優しい。見上げる天井はほどよいくらいの高さで、閉塞感のない空間を提供しているだけでなく、大きな太い梁や木の柱が独特の雰囲気を醸成している。囲炉裏をしつらえた畳敷きの和風のリビング…それは演出ではあるのだが、そこでちょこんと座って談笑するお年寄りたちの姿そのものが日本の古き良き時代はこんなふうだったんだと教えているようにも見えた。そしてお年寄りたちは風景のなかに溶け込み、自分たちの居場所をしっかりと確認しているようにも思えた。

認知障害に配慮して作られた中庭を囲んだ回廊

案内を受けるごとにどれ一つをとっても考え抜かれた空間であり、しつらえがあることに感心する。別の言い方をすればそれは、入居者を管理するのではなく、いつもお年寄りの姿や行動にさりげなく目が届くような設計であるということと、環境が痴呆のお年寄りたちを自然に誘うというその影響力である。

中庭を囲む廊下を歩きながら、痴呆の特長の一つである徘徊との関係について蓬田さんはこう説明した。「どの場所も全く特徴のない回廊型の造りというのは、痴呆のお年寄りの徘徊を誘発する廊下だそうです。好きなだけ徘徊できるようにという意図があったようですが、これは一見、やさしい配慮のようでいて、自分がどこにいるのか分からなくなりやすい痴呆症の人にはむしろ混乱を招いて延々と徘徊を続けることになります」。

中庭が廊下で囲まれ、その外側が部屋や壁で閉じられてしまうと痴呆の人は方向感覚を見失い、場所を認識できなくなる。そこで「こもれびの家」では、方位感覚を助けるために、玄関の土間とそれに連続する座敷、そして食堂の奥に配置された開口部の三カ所で戸外の景観を採り入れることによって、廊下のサーキュレーション内での場所の認知をしやすくしている。



⑬建物内を一つ一つ案内してくださる蓬田さんの説明に田中所長も終始うなづく。個室の前には入居者が思い思いに描いた絵などが掛けられている。「ここからは自分の世界であるという目印」だ。⑯⑱⑲自分の居場所がよくわからないのが痴呆の特長の一つであり、そのために場所を認識しやすいように各所に目印となるさまざまな暖簾が掛けられている。⑰個室内は、入居者になじみのある慣れ親しんだ調度品や身の回り品で飾られている。持ち込む荷物は入居する前に家族の方から細かなヒアリングをして決めるそうだ。

そのほか、回廊には意図的にいろいろな変化をつけている。空間を明確に区分し、各個室の入り口にははっきりと識別できる色違いの暖簾がかけてある。大きな置き時計、季節ごとの花…そうしたものが目線の高さで確認できるようにしてあり、時間や季節を認識しながら安心して暮らせるように工夫している。

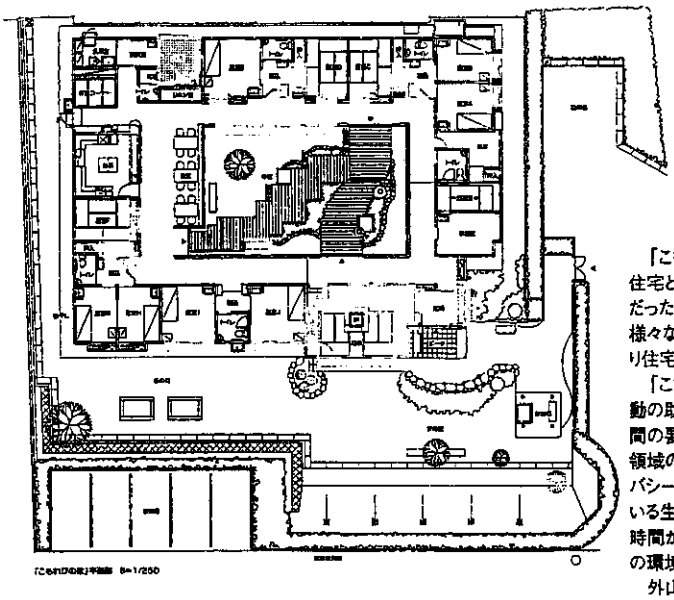
廊下幅は1.8メートルで、長さは11メートルを超えると高齢者には大きな負担になるために、途中にソファが置かれていて、そこがちょっとした談話の場所としてパブリックとプライベートな空間の橋渡し的な機能を持っている。また廊下には手摺りがなく、ガラス窓の窓枠の一部が手摺りの役を果していて、このほうが見た目にも自然である。

居室は、もう一つの本当の我が家

ところでグループホームでもっとも大切な要素とされているのが個室である。個室はグループホームの中のもう一つの我が家である。単に個人の居室以上のものである。痴呆のお年寄りには逃げ場がないというのは不安感を増幅させる大きな要素であり、逃げ場としての個室は自分だけの世界として重要だ。「こもれびの家」で感心するのは、この自分だけの領域から大勢が集うパブリックな空間の距離が本人の意思と気分しだいで段階的に選択できる点である。人と触れたいときにはパブリックな場に出る、大勢でいるのが嫌なら廊下のベンチで人の姿を見ながら過ごす。そして誰にも会いたくなく、1人でいたいという気持ちのときには個室で過ごす。

さらに蓬田さんはこんな話をしてくれた。「やはり痴呆の特長の一つにモノ盗られ妄想というのがあります。モノがなくなると誰かに盗られたと思ってしまう。複数の人が同室である場合、盗られたとなると隣人を疑ってかかることがある。これがトラブルの原因になるわけですが、自分で鍵をかけられる個室の場合ですとそういうトラブルは防ぐことができます」と。個室は孤独感を入居者に強いるのでなく、誰の干渉もなく自由で気ままにその人らしさを表現する「家」でなければならない。「入居者それぞれの人生観、こだわり、生活習慣に沿った生活空間を確保できるように支援していくことが大切です」と蓬田さんは話している。

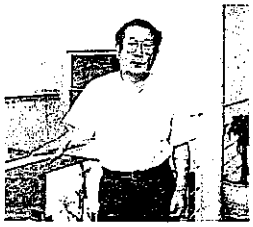
「こもれびの家」で個室はどうしつらえられているのか。まず居室にはすべて洗面がついている。大きく分けて痴呆のレベルや人間関係を考慮して2つの居室群で構成されコミュニケーションドアで2室連続で使える部屋を和室・洋室それぞれ一組。全体では和室3室、洋室7室。症状の比較的軽度の人は南側に配し、縁側を通じて直接庭から出入りできるようになっている。そして特長的なのはいずれの部屋にも「踏み込み」と呼ばれる小さな空間があることだ。ここにはっきり識別できる暖簾がかかっていて外部との境界の役を果している。つまり玄関である。「入居者にとってここが本人の玄関なのです」と蓬田さんはいう。この奥に絵



「こもれびの家」平面図 S=1/250

「こもれびの家」●建ぺい率／70%●容積率／270%
●敷地面積／1,475㎡●建築面積／427,91㎡●延床面積／391,88㎡
●竣工／1997年●総工費／1億3,300万円

建築家 塩入健史さん



「こもれびの家」は外山義氏の協力を得て東北設計計画研究所の塩入健史所長が設計した。医療・福祉施設をはじめ公共施設の設計を数多く手がけている。

「こもれびの家」は、グループホームが福祉系施設として認定されず、建築基準法上は、共同住宅として指導された時代だったが、福祉系の設計に携わる者としては、ぜひ経験したい施設だった。「グループホームは、終の住処としての住宅である」との思いはあるが、クリアーすべき様々な条件や、運営上の課題も厳しく、設計上は、施設としての制約を消化した上で、可能な限り住宅的に構成するという姿勢が必要だろうと思っている。

「こもれびの家」では、和風住宅の空間形式に対応する習慣や記憶が、痴呆患者の生活行動の助けとなり、欧米に比べて家具への依存の少ない我が国の高齢者にとって、なじみの住空間の要素が家庭的雰囲気をつくる手法となることに期待した。例えば、「はきかえ」による私的領域の構成、書院窓の障子の開閉によるプライバシーと交流の自己調整、続き間によるプライバシーの共有、襖の打掛金物による私領域の安心感など、普通の住宅で日常的に利用されている生活環境要素の有効性を試みた。一つ一つの試みの有効性についての検証は、もう少し時間が必要だが、痴呆のお年寄りにとって、小さな生活単位と、小さな空間が、より安心と安定の環境を保障していることは、確かだと思う。

外山先生には、計画の段階から竣工の後まで懇切な御指導をいただいた。とくにプライベートからパブリックに展開する空間のあり方や、ループ状の動線の方向性の認知について様々なアドバイスをいただくことで、より住宅的要素の充実が可能になった。現在グループホーム等、施設系と住宅系の中間の規模・性能の建築の新たな設計・工法の必要性を実感している。

柄を変えた戸襖があって、その向こうが部屋になっている。

部屋は1人で過ごすには十分な広さがあり、めいめい馴染みのもので室内は飾られている。高齢者には布団だと寝起きの負担が大きいために、基本的には負担の少ないベッドを使っている。トイレは2部屋に一つ用意され、風呂も共同で入浴するのでなく、1人用の浴槽でできるかぎりプライバシーが守れるようにしている。

痴呆症におよぼすグループホームの有効性

ちょうど昼食の準備がはじまる時間になり、各自めいめい台所に集まってきた。料理は「これから食事だ」という日常のなかで重要なリズムをつくる大切な共同作業で、五感が自立性をうながす役目も果している。「痴呆症の方でも包丁をもたせると非常にお上手なものです。野菜などを切るのもトントントンとリズミカルだし、みなさん料理の時間は元気にハツラツと楽しそうですよ」と蓬田さんは話すが、参加したくない人にはあえて強制はしない。

環境によってうながされる自発的な行為は確かに大型施設での介護には見られないものだ。しかしここでは、主役はあくまでもそれぞれの入居者であり、誰もが自立して暮らしている。一緒にいてもこの人が痴呆症であるとはとても思えない。一人離れて食堂の椅子に腰をかけていたKさんは上品な笑みを浮かべて声をかけてくれた。「ごちそうになっていってください。たんとごちそうになっていってください」。Kさんのそのニコニコした表情には陰りや不安はまったく見られない。窓の外の中庭にカツラの樹が植わっている。その幹のところにご飯粒をいれた箱があり、見ていると無数のすずめが餌をついばみに屋根と餌箱の間をせわしなく往復している。Kさんはガラス戸越しにその様子をじっと眺めてニコニコしている。こんなに沢山のすずめを見るのは何年ぶりくらいだろうか。このおだやかな光景が「こもれびの家」で暮らすお年寄りたちの心の平穏を象徴しているように感じたのは思い込みではない。

蓬田さんはある入居者の例を紹介してくれた。

脳血管疾患による痴呆症のYさんは「こもれびの家」に入居する前の大型施設では、ストレスで騒ぎだす問題行動を起こす人であった。老人保健施設にいたことも記憶がない。入居当初は生活全般において感情のコントロールが困難で、夜間でも興奮すると家に帰ろうとした。身近な人の人物誤認も著しい。作話も多い。つねに、留守にしている家や畑のことが気になり、それがストレスを生んだ。しかし、介護計画を立ててストレスの所在を分析しプログラムを進めていくうちに、徐々に症状が和らいでいった。やがて掃除や調理、畑仕事に積極的に関わるようになり、「こもれびの家」が自宅だと自覚するようになる。Yさんは自分の居場所を見い出すことができただけでなく、何ごとにも自発的で精力的になった。そして入居当時要介護度3だったのが、要介護度が2に軽減したそうだ。

Yさんのように問題を抱えてよそから転院して入居さ

⑰⑱⑲中庭に面した明るくて広いリビング・ダイニング。料理は、痴呆のお年寄りの自発性をうながす重要な役割を果すとともに共同作業を通して人と人との交流を促進する効果もある。入居者で好きなメニューを考え、買い物に出かけて料理をつくる。こういう日常の暮らしの当たり前の営みがリハビリにもなっている。
⑳㉑正職員は所長の蓬田さんと、佐々木孝信さんの2人だけ。誠実で柔和な佐々木さんは幼稚園の先生もしていたそうだが、ここではお年寄りたちの"元気の素"的、かけがえのない人材である。

れる人、家族からの相談ではじめてここで暮らすようになった人…症状もさまざまだが、入居後のお年寄りの表情は明らかに当初とは違って精気が戻ってくるという。「そういう例は少なくありません。頭髪が真っ白だった人が入居後のここの暮らしで徐々に黒くなっていったというケースもあります。本当ですよ。痴呆性高齢者におよぼすグループホームの有効性はここに滞在して一緒にいると実感できるはずですよ」。と、蓬田さんは話す。

なぜグループホームか？
答えは入居者の笑顔の中に

玄関脇の囲炉裏の部屋では、若い女性のスタッフが1人の女性と話し込み、ときどき笑い声が響く。表の庭にしつらえた井戸端のベンチでは男性のスタッフが入居者と仲良く2人並んで腰かけてなにやら話し込んでいる。まるでそれは恋人同士のように微笑ましいものだった。先ほど散歩から戻ったばかりのSさんがまた散歩に出かけようと玄関で靴を履いている。女性スタッフの1人が「Sさん誰それさんが用事があるっていってたよ」と言いながらこちらに向かってウインクした。Sさんはその声にうながされ気を変えて履きかけの靴を脱いだ。

「毎日がこんな調子です」と話す女性スタッフのセリフはむろん愚痴ではない。むしろ、そうしてお年寄りと過ごしているのが楽し気であるようだった。「してあげているという意識でやっていれば絶対に信頼関係は生まれません。私たちは人生の先輩からいろんなことを教わり、幸せをいただいている。ともに支え合う気持ち、ともに暮らしている家族なのです」という蓬田さんの話には、強い自信を感じさせる説得力がある。

グループホームケアはこれからの痴呆性高齢者介護の希望だという声がある。本格的な普及はまだまだこれからだが「こもれびの家」で見たものはまさに"希望"であった。グループホームというもう一つの我が家で、痴呆症のお年寄りが若いスタッフとともに、人としての尊厳を守られながら自立的に暮らしている姿は、長い間、偏見で語られていた痴呆という暗い無機質なイメージを変えてしまった。蓬田さんは最後にこう言い切った。「なぜグループホームなのか？それは入居されている方々のお顔が答えではないでしょうか」と。

「こもれびの家」で出会ったみなさんは、確かにどの人もみな穏やかで柔和な表情であった。